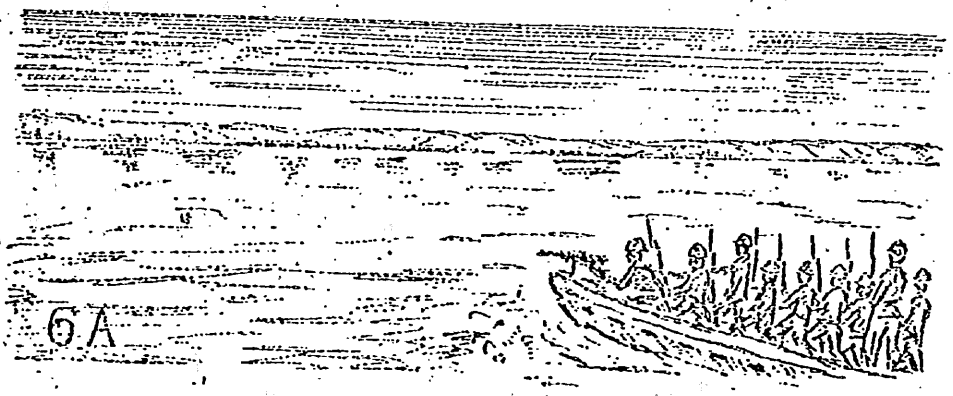


北斗星に航路を尋ねつゝ

野砲六ノ九
砲兵軍曹　中村鶴雄

十二年十月末塘沽で約五百頭の水上トラックに桟橋から搭載して白河口に停泊中の御用船スラバヤ丸に人馬車輛材料を搭載しました

塘沽で搭載する時は白河口の事とて平静でしたが白河口を離れると海上は波浪高くトラックは波にもまれて船酔する者が非常に多く艀船勤務の出来る者は元職が船員であつた者ばかりで僅かの兵員でした それでも皆が一生懸命に頑張つて兵甲斐あつて日暮前には搭載及乗船を終りました

白河口を出帆して一路東へ〳〵と航行してゐることは素人の私達にも北斗星の位

0074

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

置で判ります　朝鮮半島に沿つて東行し
十一月二日或る所に假停泊しました
翌三日此處を出帆して　船上で明治の佳節
を祝し　其の夜甲板に出て見ると　北斗星
は眞後に見えますので　船が航路を南にと
つてゐることが判りました
上陸地点の噂がそろ〳〵始り
上海？　何處？、
と噂ばかり〳〵です　十一月四日眞夜中頃
船が停りましたので　船員の話では杭州湾
沖との事です　此の拂曉から　部隊の上陸
が開始されました　掩護に來た駆逐艦より
の艦砲射撃の下に　部隊は上陸してゐる様
子です　我々は其の日一日陸の方を見て
砲声を聞きながら船上で過しました
夜が明けて六日の朝　上陸命令が來ました
準備して待つ間なく　大発動船が來て先づ
砲車材料の陸揚です　杭州湾は潮流が急で
その流れは時速七哩とか　揚子江の水
流よりも早い訳です　おまけに干潮の差が
非常に多く　二十何呎とか聞きました
其の潮流に棹さして部隊を陸揚する　工兵
の解船部隊の苦心も並大抵ではありません
が　我々砲兵も解船から砲車や材料を陸揚
するのは　一通の苦心ではありませんでした
全員裸体になつて　腰程の深さに飛びこん
で　発動船から車輪を砂浜まで　近い時で
も二三百米　遠い時は数百米の沖から　繋
馬索を付けて引揚げるのです　砂浜の所は
よいが　泥濘の軟いところでは　砲車がめ
りこむし　繋馬索を引く足がめりこんで仲々
揚りません
ぐづ〳〵してゐると滿潮になる　早く〳〵
と急ぎますが　潮足は早く　僅か一時間足
らずで数百米の砂浜が忽ち無くなつてしま

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ひました
それでも翌七日の朝までには 砲車と材料
と人員の半数は陸揚しました 或る部隊で
は砲車や弾薬車を潮に奪れて 次の干潮ま
で其の儘にして置いたとのことでした
さて陸揚はしましたが 海岸から本道迄は
数百米で 輓馬だけではとても車輛を本道
上に出すことは出来ません 先行部隊が部
落は全部占領して居るので露営する部落も
ありません おまけに冷たい雨迄降って来
ました そこで敵が築いた海岸防備用の
機関銃掩体の中に五六人もぐりこんで 生
つた儘一夜を明しましたが 其の苦しかつ
たこと 狭い掩体の中で足を伸す事も出
来ず 風通りは悪いし 誰かい放屁したの
で 其の臭いこと 息も止りそうでした
漸く夜も明けて 幸い雨も小降りになりま
したので 部落から材料を持って来て 海
岸の砂浜に茅屋根の小屋を急造して兵舎に
しました
上陸第一夜の敵掩体の中で夜を明した時の
事でありました 夕飯の準備に飯盒に米を入
れて 海岸近くのクリークで米を洗い 部
落に行って飯を炊き夕食を済ませました
翌朝又昨夕のクリークに米洗いに行って驚
きました クリークには第一線部隊が戦
斗して行った跡らしく 敵の死体が其處此
處に浮上り 流れた血で水は赤く染んでゐ
ました
二三日すると上陸の時に持って上った食
料品はぼつぼつ欠乏して来ましたので 附
近の農家を物色して 白米や食塩も徴発し
敢等料理して腹を満す様な状態でした
乗輓馬の陸揚は 数日間に亘って行れまし

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

たが、狭い船の中に半月近くも積み込まれて、
みた馬の暮ぶりは、いたらしい程でした
馬も大分痩せて来ました
其の悪いコンディションで、杭州湾から松
江道路に出る迄は、道無きところに道を作
りつゝ、毎日々々、雨に叩かれながら、
泥ンコになつての難行軍、一番多く馬をつ
けた時は十二頭中二十四頭、其の馬が全部流
の為め足が疲れず、ぺつしやんこに寝てし
まつたこともありました

川柳

砲六　工本　川添新蔵

◎腑までもぬらし果てた
敵の陣

◎ぬかるみに米のなる木を
道に敷き

精根を盡して陸揚作業

野砲六ノ二
輜重兵一等兵　安部雅人

昭和十二年十一月四日　明日は愈々陸揚
勤務員として歩兵と共に上陸　との命を受
けました
十日余りも狭い船の中に閉じ込められて居
ましたので　一日も早く上陸したい　と思
ふ矢先ですから皆んな喜びました
其の日は上陸の予行演習を行つて　翌朝本
船から小舟に乗りこんだのですが　其の時
は歩兵の大部分は已に上陸してゐました
朝霧に小雨の降る中を　舟は次第に岸

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

に近づいて行きます

「上陸準備」

の号令で皆 袴を脱ぎ初めましたが 舟が岸まで行かず 裸体になって作業を開始しました

次々に砲車が運ばれますが 敵は此の岸を狙って射撃をするのです 小銃 機関銃弾が ビュッ〳〵 と唸をたてゝ飛んで来る

無念にも戰友が倒れてゐます

其處を通過する時でした

「アッ しまった 足をやられた」 と

云ふ声がします 振り向いて見ると 後から来た戰友が 直ぐ其の負傷者を肩にかけて行きます

さうする裡に 銃声は次第に遠くなり

やっとホットしました

然し太陽は已に隠れて辺りは暗くなりました

それでも本船から運ぶだけは 陸揚せねば

なりません

私共は一寸の暇も有りませんでした

戰友の時計は既に夜の十一時を示してゐます 時の経つのも忘れて居たのでした

潮は段々満ちて来るので 舟は砂原より

二三百米も沖で 砲車を卸します

「全員かゝれ」

の号令で皆縄を握り 精限り魂かぎり

引けども押せども なかなか動きません

砲車は砂の中に深くめりこんでゐるのです

潮はもう胸のところまで来ます

これでは仕方がない 舟を呼べと云ふ訳で

小舟を呼んで曳かせ 漸く砂原まで引揚げて 其の夜の陸揚げは終りました

作業が終ると 急に寒くなりました 余りの寒さに寢る事も出来ません

火を焚こう と話してゐる處へ 將校の方が通りがゝられて

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「馬鹿ナ 今此処デ火ヲ焚いたら大変だ
敵ニ直ぐ射撃ヲ受けるから」止めろ
と注意されて 皆んな裸体のまゝ 毛布一
枚ニ四五人づゝ 砂原の上で 寒い夜を明
しました
朝飯を炊くことも出来ず 煙草はなし 又
同じ陸場作業を始めました 而し其の日は
幸にも天気で 作業を捗りました
土手に上って見ますと 其処は墓場で 其
の向ふ一面は塩田でした
其の又向ふの森の中に一軒の家が見えます
其の家は木造りで 傍らには竹藪もあります 北支には竹一本もなく 木造りの家な
ど一軒もなかったのに
此は全く内地の様な所だなどゝ 戦友と語
り合ひ乍ら
新戦場を親しみ深く眺めたことでした

首近はいって上陸しました

野砲六 一三
衛生上等兵 野口豊人

永い間の船舶輸送で 身心共に疲れてゐました 自分達はこれから何處に行くのか
又今 何処を航海中なのかも判らず 只朝
から晩まで 食って寝るのが仕事でした
数日間何一つ見えない大海原を航海しての
或る日
「島が見えるぞッ」
「島だ 島だ」と
新発見でもしたかの様に 甲板上の兵隊達
が 船室に呼びかけます
私は一番に甲板に飛び上りました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

全く夢の様に美しい島でした　島の遠く向
小に　黒い一線の防波堤の様に大陸が横
たはつてゐます
やがて船は停りました
隊長殿は全員を集合させて　敵前上陸の命
令を達せられました
夕方よりの風は益々強くなり　風を切る針
金が弾が飛ぶ様な音をたてます　其の外何
一つ聞えません　戰前の静かさが　かへつ
て物凄く感ぜられます
其の様な日が二日過ぎました　次々に戰況
が報じられます　上陸に対する注意がありま
した
海軍の砲撃で敵陣地は大災を起してゐます
待ちに待つた朝は　とう〳〵来ました
嵐も止み　朝霧で一寸先も見えません
近くの瓶でも上陸を開始したらしく　クレ
ーンの音が　ゴト〳〵　と忙しげに聞えま
す　先発隊について私も上陸しました
潮の満干が早いので船を遠くまでやつてく
れませんので　飛びこんで見ると　潮水が
首迄来ます　流されぼしないかと心配する
程でした
大砲も深い所に却すので　見る〳〵裡に隠
れてしまひ　一晩中探してゐる部隊もありま
した
上陸して見ると　海岸線には堅固に築かれ
た陣地に　気味悪く銃口が聞いてゐます
「こんな立派な陣地があるがらし」と
逃げた支那兵を喰いましたが　自分達が無
事で上陸出来たのを感謝しました
上陸と共に追撃戰でした　潮水を拭いもせ
ず　軍服を着たので　全身に痒い湿疹がで
きて　體を掻き〳〵　追撃しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

□□□□□□□□□

在留邦人に感激しつゝ

野砲六一二
砲兵上等兵　川畑富男

北支より中支に轉戰　紋深い小雨がシトくと降る　十一月十七日の夜明け上海に上陸しました
大きな建物が街路の両側に　ぎっしり並んでゐるけれど　噂に聞いてゐた上海と　何んと違つた姿でせう　戰火に見る影もない様に荒れ果て　過ぎし戰のいかに激しかつたかゞ想像されます
時々英國の海軍の自動車が往來してゐる外には支那人の姿さへ見られません

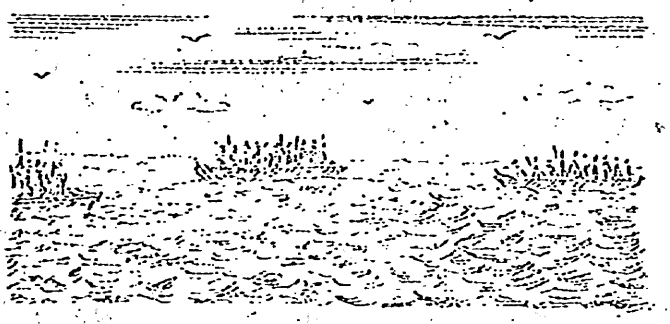
我が部隊が杭州に向つて出發したのは上陸して二時間余後の午後二時でした
日本組界を通れば　在留邦人が　日の丸の旗を振つて歡迎してくれます
何故か故國に歸へつた様な氣がします
両側の家は蜂の巣の様になつてゐます
こんな危險な所によく無事で最後まで居て下さつたと思ふと　感謝の念で一杯でした

川柳

砲六　工本
上等兵　川添新藏

松や竹　北支で見らず　目もれく
ぬかるみに　足をぬかんと　人をよび

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



決死隊は見事上陸成功

野砲六ノ六　砲兵伍長　上峯晴次

昭和十二年十一月五日　我軍用船あさか丸外数十艘は軍艦に守られて上海戰線の敵側背の杭州湾に上り込みました

この大軍の侵入も知らぬか　銃声一つしません

海上には朝霧が立ちこめて　二十米も先は皆目わかりません

正義皇軍のために

神の授け賜った煙幕でせう　我軍の士気はいやが上にも昂りました

上陸開始の命令に　歩兵〇〇名の決死隊は二艘の船に分乘し　敵陣目指して朝霧の中に消えました

無事成功を祈るも暫し　敵陣地から射ち出す砲聲と共に　砲弾の凄ゞい炸裂の音が朝の静かな杭州湾に響き始めました

第二回目の上陸は私共の小隊です　第二回上陸は成功したらしく　銃砲声とぴろき疲る彼方から二艘共引返して来ました

第一小隊上陸い

との中隊長殿の命令に武装を整へ　砲車を

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

舟に積み込みました　私は軽機関銃手として決死隊の一員に加はり銃身も折れんばかりに握り締めて乗舟しました

一度も見た事の無い上陸地点はどんなところだらう？　と胸を躍らせながら敵陣地へ突進すること約二十分　舟底がつかえて停止しました

「飛び込め」

と　中隊長殿の命令に　機関銃を頭上に差上げ海中におどり込みました

砲撃も下されました　そして敵陣目懸けてどん〳〵突撃です　此の野砲の突撃目の前に見た正面の敵は　退却し始めましたが　逃げ乍らも盲ら射ちに撃つ弾丸が前後左右に弾着します　しかし一名の負傷者も出さず　無事に敵陣地を占領する事が出来ました

直ちに砲列を布置し　観測所は敵前百米に

推進　四方八方の敵陣に対し撃ち出す弾丸は一斉々々命中　敵の陣地は高く吹上げられます　此の猛射に敵は怖れてか沖で退却を始めました　時々飛来する敵弾は哀れにも不発弾ばかりです　勢に乗じた歩兵は我掩護下に突撃開始　敵の砲兵陣地占領と共山砲四門を分捕りましたが　尚も追撃前進してゐるらしく　銃声は次第々々に遠ざかって行きます

我部隊の左側○○部隊は　頑強に抵抗する敵に阻まれ　第一回上陸部隊も海中に伏せたまゝまだに進めず　軍艦はさかんに掩護射撃をしてゐます　飛行機もたえず急降下爆撃してゐます

やがて左側○○部隊の砲兵が和兵のところに上陸し　左側の敵に一斉射撃を敢行しましたので　さしもの敵も午后四時頃退却し始めました　この頃より三十〳〵と降り出

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

また雨は　日の暮れると共に一層はげしく
なりました
敵陣頭に立てられた日章旗が　雨の潮風に
はためいてゐます

水牛も必死
弾薬車引上げ作業

野砲六ノ八

砲兵伍長　永友　興市

昭和十二年十一月十九日午前十一時三十分
頃より　杭州湾の金山衛と云ふところに上
陸開始しました
其の日の夕方迄には我中隊も上陸し終へた
のですが　第五弾薬車が　海水の流れのは
げしさと　所柄の満潮に旋す術もなく　二
日間も海底に沈んだまゝでした
明日は愈々出発といふ十一月二十二日　今
日こそはと中隊全員　弾薬車引上げ作業に
取掛りました
十二月といへば肌寒さを覚える頃　褌一貫
で海中にとびこんで作業する　兵隊の顔の
血の気は失せて　もの言ふ口もかたくふる
へ思ふ様に話せません　兵隊達はこの寒
さを活動に依って　幾分でも忘れやうと懸
命です
隊長殿も褌一貫で来られました　若い私達
はこれに元気づいて更に頑張りますが　車
輪は根が生えた様にびくともしません　潮
は益々満ちて来ます　作業は困難となるば
かりです　皆はよい方法はないかと　水面
を泳いだり潜ったりしますが　手もつけら
れません

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

この時浅瀬の方では　誰かゞ水牛を一頭引張って來ます　この牛で引上げるのだと一人で力んでゐる様が見受られましたが皆も同意したらしく　軍せる準備をしてゐます　私は沖に居たので判然り知りませんが水牛の使ひ手は確かに蔦本海尉殿でした　あの大きい海尉殿の声に　水牛も今日ばかりは怒気で居られんかいと思ったことでせう　やがて準備よしの声に　私共は海底に潜り　弾薬車を肩に受け満身の力で擡ぎ上げました　ドッ車輌が動いたとばかり更にうんと踏ん張ると確かに動きます　水面に浮び上って一同喜色満面　同じく水中に潜り込んで　水牛の力と合せて車動までめり込んだのを　どう〳〵引上げ　弾薬車はぐん〳〵　陸の方へ引上げられて行きました

この時の橋本中隊長殿以下一同の喜びは如何ばかりだったでせう　到底筆紙にはつくされません

その後橋本大尉殿は　どんな場合でも決して水牛を食はれませんでしたが　此の時の水牛の恩を感じて　とのことでした　兵隊達は水牛隊長と稱して　その人情を陰で讃へました

見る人に
愛馬の戰功
くりかへし
―靖香―

野砲六ノニ　弾薬より

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ザンブと煙草は海の中へ

歩一 四五ノ一〇 白坂上等兵

北支の戰塵も漸くをさまり 小隊長殿も凱旋の話をされる まして兵隊達は種々勝手な予想をしていろんな話に花を咲かしてゐた頃 或日煙草倉庫を押收しました これはいゝもんが手に入つた どうせ凱旋するんだから と然張つて 五十個入を四箱もつて汽車に乘りこみました 越中さん(富山の賣藥行商人)みたいに 布で包み首にかけ 一月は口パで煙草が吸へるぞ とホク〳〵で塘沽で乘船しました どこから嗅ぎつけたか松尾曹長がヤイ〳〵言はれるので 仕方なしに一つやつてしまひました 凱旋どころかいよ〳〵杭州湾上陸ぢやさうな こら困つた といふ訳で大事にしてゐた煙草をもてあました さて上陸せねばならぬ ぬらしては困ると思ひ 煙草は鉄甲と一緒に頭にのせてゐま

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

したが　もう大丈夫と心のゆるんだ拍子に
腰までしかない浅い所に来てから　ザンブ
とばかり煙草は海の中に落してしまつた
情ないことになつたが　悔んでみてもすで
に後の祭　ヤケ糞にしぶきを蹴たて〻岸へ
上りました

船は進めど

歩四五ノ六　有村衛生軍曹

家を出る時　三、四ヶ月で戦はすむものと思
つてゐました　北支で三四ヶ月は過ぎたし
朝鮮の木浦沖では　全く凱旋かと思ひこん
でゐました
ところが意外にも　船は西へ！西へと進み
出した　正直な話が「船は進めど気は進ま
ず」といふ気が致しました
しかしそれも一すの間でした
愈々新戰場だ　敵前上陸をやるのだ　と話
が判ると（今度こそ生きては還らぬぞ）と
一死奉公の誓を新に　心に誓ひ合ひました
過去数ヶ月の戰斗の経験から　皆もう支那
兵など問題でなく　上陸前からすつかり敵
を呑んでゐました

霧の杭州灣

歩四五ノ四　松山上等兵

私は塘沽に補充員として上陸し　二三日待
つうちに　北支転戰勇士が如何にも颯爽と
して引上げて来るのをみて　自分達も今後

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

この勇士達と一緒にやれるものかしらと……
気遣れがしました
杭州湾につき　愈々敵前上陸の準備をする
時は一面の濃霧に閉ざされてゐました
汽笛が霧の中に物重たげに響くのを聞いて
何とも云ひしれぬ　身の引緊るを覚えま
した
小舟にうつり　生れて初めての敵前上陸で
す　殊に救命胴着を身につけた時は　悲壮
そのもの〻気持が致しました
半島人の船頭が海中に半身を浸し一梯子を
掴へながら
「しっかりやって下さい　私達は後方で何
も出来ないのが残念です」
と励ましてくれました
「大丈夫です　こんな戦争は何でもありま
せん　安心して見て下さい」
と　最後の言葉を交しましたが　そのとき、

の船頭の心盡し……　お茶と煙草をご馳
走して貰ひました
云ひ知れぬ感激と共に　あの時のお茶の味
も亦忘れられません

歩　四五七　野元中尉

煙も見へず雲もなく
彼の有名な黄海を南下する
途中水雷艇らしいものに遭ふと　全員甲板
に登り　所謂登艦礼をしてくれる
杭州湾北方に到る
霧深くして何処が陸地やら分りません

0088

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

海軍は　巡洋艦等で援護射撃をしてくれます　又
「ゴフントウライノル」
と手旗信号を送り我等の成功を援け　激励
してくれます
全く皇軍ならでは見られぬ美しい協同の姿
であります
霧にまぎれ　容易に上陸を敢行する事は出
来ましたが　温度はとても低く　潮の流れ
が急で多少の困難はありました

チャン酒で落伍

歩四五ノ一〇　高石上等兵

荒波打返す杭州湾に上陸後我中隊は所一分中
隊と共に一ト足先　金山を経て松江に入り
爾後崑山に向ふことになりました
十一月十一日　金山から松江に向ふ行軍途
中のことであります
塘沽で補充になった川島一等兵は古兵に教
へられて　金山附近の民家から「チャン酒」
を水筒一杯詰込んで　さも美味そうにチビ
リ〳〵やつて居ました
分隊の戦友達も
「川島の奴余程酒好きらしいぞ」と
話し乍ら行軍を続けてゐますと　川島がだ
ん〳〵遅れて来ます
「コラ歩かんか」
と押すと　足がよろ〳〵　腰がフラ〳〵です
とう〳〵ぬかるみに座りこんでしまいまし
た　それを分隊長以下銃を持つやら　装具
を外すやらして引張つて行くのです

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

元來彼は酒豪家でした　しかし チャン酒に
は未だ馴れてゐなかつたのです　それに皆
が面白がつて飲ませて置いたから堪りませ
ん　後では目を廻して　腰を抜かしてしま
ひ押しても引いても動かばこそ　全く以て
所置なしです
小隊長殿が心配してやつて來られます
叱られるな　と思つて居りますと
「何を見てゐるのか　早く水を飲ましてや
れ」
我々を叱られました
小隊長殿は酔拂つて腰を抜かして居るのを
ご存じないのです
私は突嗟に川島の水筒を取り出しました
口栓をとると酒の臭が四方にたゞよいます
これを飲ますわけにも參りません　と云
つて私の水筒には　もう一滴も水はありま
せん　戰友の水筒にもないと言います
小隊長殿は
「早く飲ませんかい」
と叱鳴られる
困つてゐる所に他の戰友が水を持つて来て
くれました　私達がホッと救はれた様な気
がしました
松江で背嚢鼻頭に残された川島は　こゝで
すつかり元気を回復して大平府で中隊に追
及しましたが　頭をかき〳〵　済まぬ　済ま
ぬと　何をやるにも先頭に立つて良く働き
ましたので　よく小隊長殿から賞められま
した　好きな酒も行軍途中では「もうこり
こりです」と云つて飲みませんでした
愉快で朗らかな川島も　冬季攻勢に勇敢に
奮戰中　負傷して入院中です　早く元の様
な元気で　お酒が呑めるやうになる様にと

0090

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

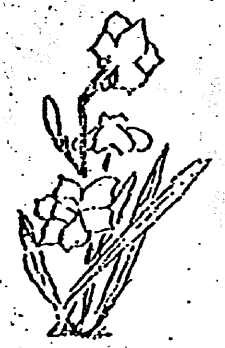
祈つてあります

纏足

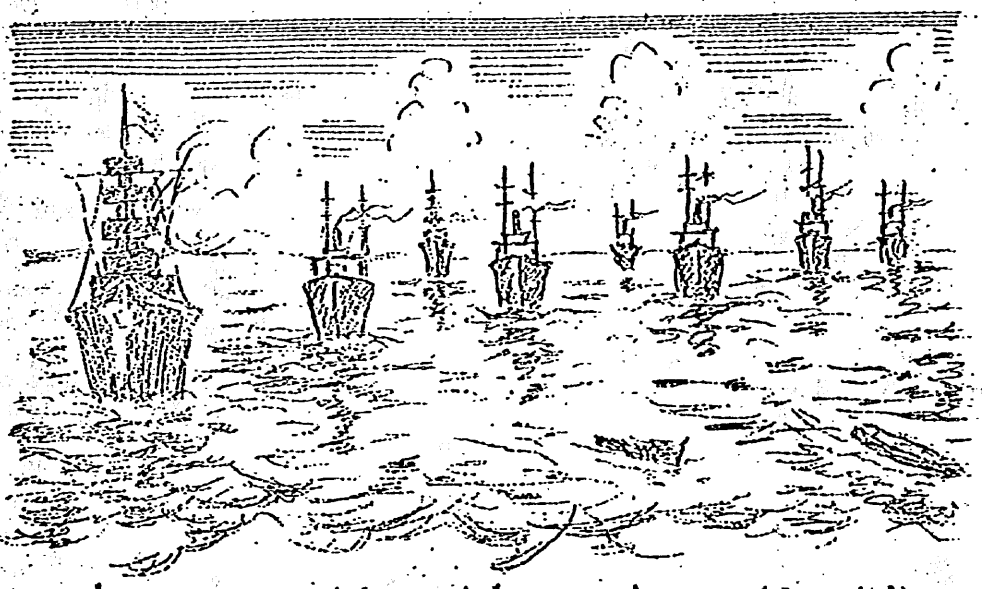
歩四五ノ二所　藤山上等兵

杭州湾上陸の後三町程行つて　金絲娘橋といふ二百戸ばかりの部落に宿営しました
こゝでは兵隊だけ先に上陸して　馬などは後から上陸するやうになりましたので　それを待つ爲に滞在することになつたのです
或日　戦友の久木田上等兵と野菜徴発に宿舎から五〇〇米程の所に來たとき　道傍に四十歳位の婦人が　流弾に當つたのでせうか　倒れてあります
非戦斗員の倒れてあるのを見たのは初めてでした

支那の婦人は纏足をやることを思ひ出して好奇心に駆られ下ら足をみましたが　足の大きさは長さ三寸五分　巾三寸位で　格構は三角形をなし　その一番尖つた所が母指で他の四指は母指にいつついてあります
こんな足で歩けるのかと思ふと　足の小さいのが美人だといふ支那の風習の不合理を熟々痛感しました
余り気毒なので　支那人を集めて死体を收容さしてやりましたが　良い事をしたと今でも想い出の一つです



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



杭州湾敵前上陸

一撃必勝 奉公の時來れり

第四野病　衛生少尉　東條末彦

吾師團が北支から中支へ轉進の時、私の居た師團配屬防疫給水班は私以下十七名で、班長は師團軍医部高級部員殿が兼務せられてゐました

沪水自動車一、トラック二でした　それを北支の塘沽で十月二十六日夜輸送本船に移乘するため　船長以下支那人許の河港内貨物船に　師團司令部の分と一諸にやって　班のものを最後に終ったのが二十三時過ぎでした　監視のため班員は　馬糞の臭氣のむっとする船艙内に仮眠して　翌朝河口を出て本船弥彦丸へ移乘し　其の日出帆しました　其の時は何處へ行くのか全く

0092

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

不明でした
途中百隻以上の輸送船が護衛艦數隻にまもられながら威風堂々進航する光景は何とも言へぬ壯快さで感奮しました
其の時海軍艦隊から
「船ノ行手ニ巨鯨ノ進出ヲ見ル　之艦隊出陣ニ於テ何ヨリノ吉兆ナリし
といふ通信と　軍司令官から
「一擧必勝奉公ノ時來レリ　切ニ將兵ノ健闘ヲ期待ス」
の訓令を達せられ一同勇躍感激しました
「意氣天を衝く」と言ふのはあんな秋のことでせう
愈々五日〇三、〇〇杭州湾沖着　敵前上陸と言ふことになつた　私達の企船した歩四七の三大隊は夜が明けてから上陸しましたが第一着に上陸した國崎支隊は却て敵に知られず無事上陸し　後からの分が苦戦したとのことでした　私達は本船から浮舟で沿岸から百米位の海中で舟から降りて腹部まで浸りながら上陸しました

船内點景

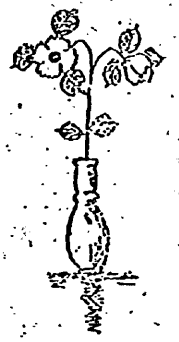
第四野病

衛生上等兵　本田　武

果てしなき北支の曠野を後に　塘沽港を出發した御用船福丸は　初冬の荒浪を乘り切つて　默々として走つてゐましたが　七日目には杭州湾沖に錨を下して居ました
狭苦しい船内　立てば頭もつかえる急造寢室の中には　退屈した兵隊が　様々な遊びをやつてゐます
トランプをする者　雜誌を讀み耽る者　手紙を書くもの　足角力に興ずる者　立派で

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

もない髭の手入に餘念のない者　朝から晩まで〳〵ごそ〳〵して居る奴　石家莊あたりで貰つたラブレターを引つぱり出して、一人ニヤ〳〵笑ひながら　たつた二枚の便箋紙を三十分餘もかゝつて讀む色男　鰹の鑵詰を今日で十日喰ふとか　鯛の刺身で一杯やり度いとか卑しいことばかり言つてゐる奴　こんな日が幾日も續きました



其の間には決死の杭州湾敵前上陸の有様もあり〳〵と見ました　荒鷲の勇猛果敢な爆撃振り　木の葉のやうに吹き飛ぶ家屋　重機の音　砲の轟き　入り乱れて夜も晝も　吾々は食事も忘れて　福丸の甲板上から此の様を見　友軍の勝利を祈りました

船内演藝會

第一野病　衛生軍曹　澁谷　利夫

私達の部隊は杭州湾附近に一時碇泊し戦機の熟するのを待ちました　何分十月一日塘沽で乗船して以来ずつと船内生活なので毎日食つてはね　起てはくふといふありさま暇つぶしに雑談に耽りつゝ日を送つてゐました

私達の部隊と一諸に架橋材料中隊が乗つてゐました　時折船内では過去の苦闘戦塵も周囲の情況の関係上忘れ勝ちになりました

或時慰安の爲演藝會が催されました　勿論素人藝で面白く　見物人の胸を驚かす様な會ばかりでした

私達の部隊から　松山一等兵（當時）が「唐

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

人お吉」を踊りました　拍手喝采の嵐が船内に起ります　自分の部隊から出てゐますので　皆鼻を高くして見てゐます

今度は架橋材料中隊の素人浪花節「紺屋高尾」です　その前の口調で関東地方の様にも思はれました　何しろ藝題が色氣たっぷりで兵隊の喜びは一通りではありません

じっと見てゐると　誰でも「高尾」を自分の物にしたかの様に一言も聞き漏らさじと情熱的に眼を瞠つてゐるのも面白い　自分もやっぱりその一人でしたが　非常に良く出來ました　拍手はいつまでも鳴り止みません　次から次へと引っぱり賑やかに過しすっかり過去の苦闘も何處へやら去った様でした

船内の給與は永い間粗食で過した身には良過ぎる程でした　又兵隊の慰安の心持かそんな所は知りませんが　毎日の様にビール サイダー　酒　豆　煙草等の加給品があり全く満点でした

時は刻々過ぎ　船は黄海（字の様に黄色な海でした）を経て朝鮮の木浦に一時碇泊　それから九州の五島列島に向って進みました

今日も運轉室の羅針の方向と睨めっこする馬場口上等兵　中食時分になると降りて來て、新しい自分の予想「ニュース」を入れ船内を大騒させる　五島列島の島が小さく見えた時は皆甲板に上って見ました　この時の嬉しさは非常なもので　胸が一杯になり　船の進行が鈍い様でした　あのうれしさはとても書き現すことは出來ません

船内では早や凱旋の噂で持ちきってゐます

誰が言ひはじめたか　話によると五島には檢疫所が出來てゐると言ふ者さへあり凱旋か否かを口論の擧句　カケ　をしやうと言ふ者もあり　話取り〳〵でした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

然し之も素の間り喜びでした　船は四十五度に轉向して進み出しました　情報は全く判らず　たゞ空想から空想へと皆の心はあてなく迷ふのでした

今迄の胸に秘めた喜びは　方向の轉廻に依り無惨に打ち壞されてしまひ　大暴風雨の止んだ後の様な情景です　皆顔をしかめ　しよんぼりと坐って居る切り話も出ません

一時に胸の中から何か拔き取られた様な感じと同時に又或強い覚悟を覚えずには居られませんでした

愈々船は進行を早め　杭州湾に到着しました　見ると　おびたゞしい艦船です　私が數へただけでも百二十隻位でした　湾内狹しと思はれるばかりの壯觀で　誰しも胸中には戦争はこれからだと言はず語らずのうちに覚悟しました

湾上からは終日幾機となく艦載機が勇ましく飛び　上海の上空から爆弾を落す　實に胸のすく思ひがする　代る〳〵投下しては還り　又飛びだして行っては思ふ存分の爆撃です

船は呉淞沖へ廻航しました　そこにもやはり百隻位居ました　目前に見える高い建物はまるで網の目の様です　こゝでも幾回と無く爆撃が繰返されました

過去の上海事変を物語る呉淞砲台も　今は死の砲台となり巨砲は徒らに海を圧する姿も今は哀れな情景ながら　之でも相當な偉力を発揮して　我が軍の血と肉とを奪ったかと思ふと　又一瞬の緊張を禁じ得ませんでした

十一月十八日上海上陸を命ぜられ大阪商船會社の西側に上陸しました　この上陸の際は羽後丸船長以下乗組員の心からの見送りに感謝しつゝ中支上陸の第一歩を強くふみ

0096

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

だしました

思へば今日迄乘船以來約三十日間の船内生活は一変して又陸上部隊として行動開始をせねばならぬ　全員武裝も物々しく波止場に建制順に整列愈々行軍です　晩秋とは言へほの暖い陽を受り　灰燼と化した廢墟上海を行進する　目にするもの総が丁度東京大震災の様だ　いやあの時よりも尚悲惨な情景です　色めかしい赤い看板も　金文字入りの店名も　弾痕や切れ〳〵の破片となり建物は主な所の中はがら空となり　三〜五〜右に左に倒壞し猫の子一匹見えず　大通の辻の看板は網の目のやうに弾痕が今だに生々しく　當時の激戰を思はせ　電柱が倒れ　電線が路上にうねり　此處彼處に電車の停止してゐるのを見つゝ行軍しました

どこの部隊か知らぬが離靈の大きいのに何か一杯入れて背負ひ慢々的歩いて居る三十四五歳らしい兵隊　髯も大分長くのびてゐた　やつぱり北支からの渡鳥らしく思はれました

午前中に街の大部分は横切り少し家屋の少い所に出ました　何分二十日振りの行軍で背嚢を溜儀一儀位の重さに感じました　皆初の内は大部元氣がよかつたが　中食後二時頃から漸く足の運びが悪くなり　マメも出来たらしく顔をしかめ默としてゐる　大分弱つたらしい　上半身は元氣だが足が思ふ様にいかぬ　二十日間の船内生活がたゝつたので　せうゝ　之に引替へ輜重車はグングン拔いて行く　けれども仕方がない　午後四時になると殆ど落伍者ばかりになつた

足は痛いし　トボ〳〵と歩き一町行つては一休　又一町行つては一休して　今晩はこの路傍で露營でもいゝから寢ようと迄思ひました　僅五里程の道が十里位もあつた様

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

に感じました
午後五時頃自動車が落伍者拾ひに來ました
何回も何回も來て落伍者を拾って行く　私
も大分がんばったが　遂に自動車の厄介に
なりました
午後六時頃でした　晩秋の陽は早くれかゝ
り蟲の聲一つ聞えず一沐の淋しさが身に迫
ります　自動車を降り宿營地上海中學校に
到着　廣大な敷地建物は　大都市上海の肩
書の樣に思はせ立派なものです。然しこの学
窓を巣立ち　更に大學に行った支那中堅青
年達が今事変を惹起させ　抗日意識を斯く
迄注入したのかと思ふと　自ら其の思想に
對し極度の奮慨に耐えられなかった
日は何時しか暮れ果て　肌寒い秋風は疲労
した体に用捨なく吹き体溫を奪ひます。こ
れから飯盒炊爨です　もう御飯は要らぬと
言っていゝ位に疲れてゐました　夜ザボン
の果實の加給品がありました　この時は非
常に嬉しく又美味しかったが　体は鉄の樣
に硬ばって　足にはマメが出來てゐました
久し振りの行軍に綿の樣に疲れ果てゝ居
ましたので　まるで死んだ樣にグッタリな
って眠ってしまひました

南下上海上陸

第四野病　高比良軍醫中尉

塘沽で下車　こゝで一夜を明しました　こ
ゝで初めて慰問袋を貰ひました　二人に一
つ貰ったのですが　玉手箱の樣な氣持で開
きました　家からも小包が來て居たし小包
が山程ありました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

翌日小さい舟に乗り　それから大きい船に乗り移って出発しましたが　どちらに行くのか判らない　山東半島を真直に行けば内地へ行くと話て居ましたが　さっぱり判らない　船長も知りません

出発後六時間経って方向を見ると右向け右をして一路上海へ〳〵と行ってゐました

上海を廻り杭州湾の金山衛沖に着きました　處又引返して上海へ行けと言ふ命令で揚子江の中に這入りました

最初船に乗った時は皆喜びました　休養は永いし　足は長くして寝られるし　ところが段々日數が経って行くにつれて　後には米が無くなる　水が足りなくなる　燃料の石炭が不足して來る　といふ状態で皆心配しだしましたので携行糧秣を使用して凌ぎました

其の内十一月二十二日上海に二、三泊りましたが見物する處はなし　日本人租界には日本人が僅かしか居ない　日本のカフエーしが二三軒位で夜は真暗です　二十五日に〇〇を出発しました

小行李員も急造担架で患者收容

第二野病

輜重兵上等兵　矢野篤藏

同　恒吉春次

十一月五日未明　突如上陸開始されました

折柄襲來の濃霧を天與の煙幕として　先づ歩兵の上陸です

兵隊を満載したランチが幾隻となく濃霧の中に軽快な音を立て、北岸めざして爆進す

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

る

吾々はだゞ成功を神に祈るばかりです　やがて護衛の軍艦からも一斉に巨砲が火を吹き始める後はもう殷々たる砲聲と豆をイルやうな銃聲　ひっきりなしに往復するランチの爆音の世界です

やがて濃霧も次第に薄れて夜明となる　今度は私達の上陸の番

私達の第二野戰病院からも患者收容及病院開設地設營の爲若干先行することになりました　病院開設となれば　私達の小行李も馬繫場及宿舍等選定する必要がある関係で小行李からも長以下十一名が先行することになりました　幸ひ私もその一員に加へられて感激一入なものがありました

やがて私達は上陸開始　私達二十數名を載せたランチは　甲板上でハンカチを振ってくれる戰友達を後に一直線に海岸に進む

海岸の砂濱もやがて眼前に近づく　更に進めばあゝ見える〳〵　軍艦から猛烈に射ち出す巨弾が砂煙と共に木葉微塵に粉碎する敵陣　日の丸の旗と共に縱横に駆けめぐる我が歩兵　ニュース映画さながらです　思はず喝采したくなる

砂濱まで後二百米　この頃になると　漸く敵の流弾がヒッキりなしに無氣味な音をして頭上を過ぎる　もう誰も口をきく者はなくなりました

後五十米　下船の命令で　私達は我先にと海中に躍りこむ　水深は意外に深い　腰まで没する水の中に　私達は唯夢中になって走るばかりです　漸く砂地に辿り着き　早速附近の遮蔽物に身をよせて皆の集るのを待つ

敵は猛烈にうち出したらしく　流弾が一層激しく頭上をかすめる　私達病院の上陸に

0100

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

は尚早の恨なきに非ずでありますが　こうなれば致し方はありません
患者はあちこちに出る　病院開設と決りました　軍醫少尉殿が病院長です　以下十數名の小收容班は直に作業にとりかゝりました
私達小行李は経驗が無いので　ぼんやりしてゐると患者を收容して此處まで運んでくれとの話です　担架を借り受け出かけることにしました
歩兵の或小尉殿が　私達を衛生隊の担架隊と間違へたのでせう
「こゝから千米位南方の砂濱に患者が澤山居るから收容せよ」
との命令です　附近を見廻せば衛生隊らしい者は誰も居らぬ　もしかうなれば任務の如何を言つてゐる場合ではない　十名の輜重兵が直に衛生隊と早変りしてしまつた

担架は一つしか無い　そこで船の丸い浮袋を二本の竹にくゝりつけて急造担架とし出かけました　南の方に行くにつれ流弾が更に激しく頭上をかすめる　右手の砂丘に遮蔽してゐる歩兵が
「危險だ」
と注意してくれる厚意をきゝ流して　唯一途に目的地に進む　行くこと五〇〇米この邊りから　そろ〳〵患者が見受けられる
中には既に冷くなつてゐる人もある　冷い骸は歩兵の戰友の助を借りて物かげに安置し早速二人を收容して帰りました
無氣味にすぎる流弾に氣は焦れど　初て擔ぐ擔架　肩骨は痛むし　足は進まず　其の苦労は並大抵ぢやない　漸く帰りつけば軍醫殿以下衛生兵の連中は繃帶に大童です
私達も負けてはならぬ　患者を置くより早く再び以前の地に引返す　一度より二度

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

[illegible]は生殘した船の陸に四五名の患者がうごめいてゐる　可哀想に上陸の途中　水の中でやられたらしい　出血甚しく唇は早や土色に変つてゐる　私達は助かることを神に念じつゝ担架に載せて運びました

全員收容してほつと息つく暇もなく　今度は更に病院船へ担送です　独歩患者には肩を貸し　担送患者は担架で運搬の手傳をする　僅か十名の小人數乍ら驚くべき能率です　正式な看護法も知らないが　私達は誠心を以て患者に接したと自負してゐます

全員收容し終る頃　夕闇は次第に濃くなつて来ました　夥かげにかくれてふかす煙草の味は又格別です

收容の途上冷くなつた人々には實際氣の毒に堪えませんが　私達が誠心以て收容した患者はきつと全快してくれることゝ信じ又さう祈つて止みません　敵はもう大分退却したらしく　流弾も稀になつて来ました

沖の本船からは無數のランチが兵隊を満載して陸續と進んで来ます　名にし負ふ杭州湾の急潮を押切り潮煙と共に爆進するランチ群　空には勝利を告げる海軍機の爆音　斯くて上海戦の勝敗を一挙に賭けた杭州湾敵前上陸は大成功裡に進捗しました

皇國まで響れて衛生部隊の陸揚げ

第二野病　衛生上等兵　水本長喜

世界戦史に燦然と光輝を放つ杭州湾敵前上陸も吾々が生駒丸に居た當時は敵前上陸な

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ど誰一人知らず　兵の半分位は凱旋ではないだらうかと思ひ何處の方向にむかつて居るかと　甲板上に登つて磯辺を見て居る者ばかりでした

百數十隻の御用船は船首を揃えて軍艦の護衛を受けて進行しました　揚子江口に差しかゝると駆逐艦が悠々と煙幕を展開　近辺は忽のうちに黒煙と濃霧の中に囲まれてしまった

敵前上陸の予報があり吾々は日頃から救命具着用の練習もし　準備してゐました　愈々敵前上陸の命令は降りました　當日は午前三時に起きて　究屈な船内で出発準備に大混雑を極めました　戦友重田君が丁度蟯様突起炎の再発のため側で看病に務め重田君の装具迄取纒め出発を待ちましたが下船命令は一向に下らない　敵の方を眺めながら船員達と語つてゐました

「こんな多くの兵隊さんのうちに戦死はなさ[illegible]れる方もあるだらう　誰が戦死するかわからないのですね」

と船員の一人が感慨深げに言ふのを人ごとのやうにきいてゐました　正午頃下船命令が降りました　私は重田君の装具迄二人分もち　救命具の上から背嚢二つ背負ひ　まるで潜水夫のやうな恰好で体は縛りつけられてゐるやうでした

私達部隊は十二時頃から下り始め私は三十分下船懐しい船員さん達と萬歳を叫んで別れ　縄梯子を辿り第二番目の発動艇に移り濁浪を乗り切り急流を遡行し　岸の方へ近づいてゆけば左側の方では我が軍艦が御用船を警戒し乍ら盛に敵陣目がけて砲撃を續けてゐます　大砲を発射する時の閃光耳を劈く音響　敵陣地で爆発して黒煙が濛々と立ち昇るのは　見るからに勇しく力強く感

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ぜられました
上陸地は金山衛　船は出来る限り岸に横着けたが動けなくなり　工兵は体半分ずぶ濡れになり竿をもつて船を淺瀬の方に近づけてくれるけれども　とう〳〵船は動けなくなつてしまひました
軍服を脱ぎ裝具と一諸に梱包して　何時でも降りることの出來るやうに用意して居たが　船が動かないので裝具を頭の上に載せて腰迄ある處に這入　貴重な衛生材料も濡れぬやうにと頭上に載せザンブと濁水の中を歩き出しました
一回上陸して再び医板を運搬にはいつた時は　もう淺瀬の筋道が判らず　乳の處まで濡れる位深い所もありました　皆ワツショ〳〵で敏速に運んで居るが　河岸の方から部隊長殿が早く〳〵と焦立つて居られます

金山衛の海岸に上陸した時　先づ北支の風景と一変してゐるのには吃驚した　家の外觀は内地と同様で　なんだか内地の一隅に来たやうな感じがしました　左側の先方にはひつきりなしに弾の音が聞えて居て　尚激戦は續いてゐます
私達が上陸した處は案外靜穩でした　部隊の半數は激戦の中に上陸し　衛生隊と行動を共にし　砲煙弾雨の中に弾を潜つて傷者を收容して　病院船に担送するやら應急手當をするやら　その機敏な動作神速な働きには全く華々しいものがありました
戦争とは言へ水牛や牛が喜んで畑の甘藷蔓等を飽食して歩き廻り　又犬が喜んで戦兵の屍を咬んでゐるのを眺めては　戦争でなくては見られぬ狀景だと感じました
小雨はひつきりなしにしよぼ〳〵降り續いてゐます　私達は持つてゐた携帯天幕を

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

被り乍ら寒い雨にぬれ汚いドブ〳〵の小道を辿り〳〵海岸に急ぎ　衛生材料の居くのを待つておましたが　待つ甲斐もなく遂来ませんので　午後三時　ぬかるみの畦道をすべり乍ら宿舎に帰りました

糧秣の補給もなく　現地物資徴発で　水もなく　附近一帯はクリークの濁り水です

甕の中に溜つた雨水を使用したりしておましたが足りません　一粒位の處まで雨に濡れ乍ら汲みに行く　一回目はきれいな水も二回目に行つて来ると　もうそこら近辺は濁つて汚い草等が浮いてあます　それでも外に水のないため　草をかき分けて汲みその水で飯を焚くありさまでした

「あゝ　こんな時　人間の体も食べずにすむものなら　こんな苦労はなからうに」と思ふと　食はんがための苦労をする人間が情なくなりました

皮肉にも雨は何時までも降り續く　砲聲銃聲は盛に聞え　空には絶えず爆音すさまじく我が空軍が敵陣地爆撃に活躍を續けて居ります　夜になると軍艦から三條も四條も空中に探照燈が光つてゐる

終日終夜雨ばかり　實に汚い二夜を明した

明くれば十一月七日　今日も相変らずの降雨　風強く　逆巻く怒濤に半分切れかけて居る日章旗を靡かせて活躍をつゞけてゐる発動艇の勇姿「戦争だなゝ」といふ感が強く〳〵胸をうつ

私は戰友重田君を護送して海岸迄行つたが激しい風浪に病院船との連絡も取れず　とう〳〵引返してまつた

衛生材料の運搬も杜絶してしまひました

汚い宿舎では毎日々々現地物資徴発です

翌八日　天候も快晴におもむき久しぶりに心氣も爽快になつて来ました　今日は衛生材

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

料運搬の連絡もあらかじめ干潮時に皆集合しました　沖の方三粁位の所に二隻の船が並んで見える

「あれだ〳〵」

と干潮の中を車輛を引つぱつて行きました

然し船迄下しにゆくにば相當に深い様様です

兵の二三名が最初ズボンを捲り上げて先に進み　深さを計るつもりで入つてみたが船の側に屆きさうにもなく　相當に深いらしい　皆でどうしたらいゝか　と思案してゐるところに　高本書長殿がやつて來られて

「みんなはいれ　泳いで行つて二三名上つて材料を下せ」

と言はれたので皆はその一聲に先を爭つて軍衣を脱ぎ千人針迄はづして頭上に載せ何處迄も浸る覚悟でザンブ〳〵と飛び込んだ　最初は大腿部　腹部と濡れ　何此位ならと思つて油断して居る者もありましたが　船に着く寸前　胸迄浸り首に水が入つて來たので　泳いで船にとりつき船員さん達から引揚げて貰ひました

軍衣を船に預けて置いて　裸で衛生材料を運び最初は面白さうに働いてゐたが　度重なるにつれて寒くなり　終る前にはもうぶる〳〵震へだし元氣も衰へてしまひました

船から下した衛生材料を車輛に積載し海岸迄運搬するのが亦一苦労で　ぬかるみを避けながら力を合せて運びました　寒い海中でも皆勢立ち　苦労も諸共といふ氣で辛いなど思ふ者は一人もありませんでした

しかし此の有様を銃後の人達に見せたらどんな氣持がすることだらうかと思ひました

午後になつたら寒くて〳〵仕方がありま

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

せん　上官もこの有様を眺め
「一時作業中止　満潮を待て」
と命令を出されました
満潮を待ち午後三時三十分からやりつぱな
しワッショイ〳〵の掛声勇しく　海中の
寒さも忘れて運搬をつゞけました　遠慮な
く太陽はいつしか没し　あたりは真暗にな
つてしまひ　海岸と沖の連絡も絶え勝ちで
す　久保大尉殿は海岸の方で懐中電燈をグ
ル〳〵廻しながら
「野戦病院　野戦びよーいーん」
と有る限りの声を出して呼び叫んで居られ
る
皆電燈の明りと久保大尉殿の呼び声を見當
にして真暗な海中で運搬に夢中です　十時
近迄運びましたが全部終らず二十名位の監視
兵を残し暗黒の道を宿舎に帰りました
その夜は皆夜中の一時頃迄火を焚いて体を
温めました
残りの衛生材料は九日の午前中に運搬を終
り午後はクリーク迄急救用材料を運搬して
支那民船の小さいのに積載し　船上勤務
隊と陸上隊に分れ　船を引ぱり乍ら前線へ
〳〵と行軍を續け　湖東作戦に参加したの
であります

朝に王公　夕に乞食

衛生隊　高野少佐

杭州湾上陸迄の船中生活はビールはある馳
走はある　貴公然たる豪快さでした
さて上陸後と來たら　兵站線の續かない爲食糧
は不足するし塩　醤油もなく　野菜をその儘
煮て食つたが苦くて食へない　おまけに雨は降つ
て頭から濡れ鼠　軒下に僅かに雨を凌いでゐる
姿は全く乞食も同様です　船中の生活と思ひ合せ
て「朝に王公　夕に乞食」だと皆と語つて苦笑した事でした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

寒い海中の荷揚作業

第二野病
衛生上等兵　元田正志

杭州湾に上陸した我が病院も衛生材料の大部分は陸揚げ出来ず　止むなく時の至るのを待ってゐました

宿舎から海岸まで約二粁もありましたので交互に材料の来るのを見張りに出て居ました

私達が上陸して四日目十一月八日午前十時頃船見張の傳令が材料の到着を知して来たので全員作業にかゝりました

當時の高本曹長殿の指揮に依り十名位を一組にして陸揚げの作業に従ひました　勿論陸揚勤務の者もありましたが　私は海上輸送勤務でしたので組の者と共に全裸体となり指定された材料積載の船に向ひました

膝から大腿に更に腰にと潮の深くなって来るのが氣にかゝる位でした　船まで後百米位といふ所まで行くと遂に乳の深さになりました　それでも一同は「行け〳〵」と物ともせず船に接近して行きました　後二三十米位になったら　もう首まで潮がかゝりました　海水を飲まんばかりです　自分は爪先を立てながら　やっと船にとりつきました　戦友に交る〳〵手を引かれて船に上りました

雨は止んでゐましたが可成り強い風がありましたので　船上の寒さは　どうしようもない位でした

皆裸でブル〳〵震へてゐるので　戦友の永山一等兵が

「みんな　河童みたいだ」

と言って笑はせました

午後の一時頃でした「一時も早く陸揚を」と氣をもみますが　すぐに陸揚げも出来ず

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

だが寒さに震へてゐるばかりでした
午後三時頃やつと船は浮びました　でも思ふ様に陸揚は出來ず　第七十号と書いた船に近寄つて其の船に材料を積み替へるのでした　今少し満潮すれば此の船は浮び岸近く行くことが出來るとのことで　又それから消永い時を待つて　寒さをこらへました
全員一枚のシヤツなしです十一月八日と言へば陸でもさう暖くはない位ですから　其の時の寒さは實際話にならぬほどでした　余りの寒さに自分は船員の作業用らしい油にまみれた眞黒いドロ〳〵のズボンだけを借りて寒さを凌ぎましたが思ふほど暖ることも出來ませんでした
午後四時頃船員の夕飯の殘りを貰つて一同夕食をすることになりましたが私は船酔ひの苦しさと寒さのため夕食もとらず時を待ちました　乘り物苦手の自分があの時ばかりは自分自ら情無く思はれてなりませんでした
相當の苦しさを制しながら時をまちました
午後五時頃になつてやつと陸揚に取りかゝることが出來ました　すると今まで寒さに參つてゐた戦友も自分も　今迄のことはケロリと忘れたやうに意氣軒昂と立ち上り作業に勵みました　杭州湾の濁つた海水に浮べて陸まで引ぱつて行く者もあります　自分は何か知ら大切な荷物でした　高本曹長殿が「水に濡してはいかん」と言はれましたので頭の上に乘せてエッサ〳〵の掛声と共に約四百米位もある陸まで急ぎました　二度も三度も繰り返し〳〵一生懸命にやりました
其の頃杭州湾の海上に赤くキラ〳〵と波を光らせて夕陽は沒して行くのでした　赤い夕陽を背に浴びて材料陸揚に活躍してゐる有様は壯觀と言ふよりもむしろたのもしい限りでした
午後七時頃作業を終へ　海岸に揚げた材料の監視員を殘して全員宿舎に引き上げました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp